
勇者はひらりと身をかわし

草木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者はひらりと身をかわし

【Nコード】

N7652Z

【作者名】

草木

【あらすじ】

腐れ大学生の工藤宮人は、ある日よんどころない事情から異世界に転移する。「今の時代なかなか就職も厳しいし、こっちで生きていくのも悪くないか」などと悠長に構える暇もなく、次から次へと芽づる式の災難が彼を襲う。気の毒な工藤に明日はあるのか。たぶん無い。そんな新感覚回避系ファンタジー。

イ・端緒にして日常

ロールカーテンごしに差しこむ夕日が、室内をあかね色に染めあげている。

おれは目を擦って目やにを落とすと、腥いあくびをして体を起こした。

居間で寝ちまったのか。

缶ビールを数本呑んだ程度なのに、こめかみの奥が疼く。コタツで寝たせいで、軽い脱水症状になっているらしい。

ふらふらと立ちあがって台所で水をがぶ飲みする。きんきんに冷えた真冬の水が胃袋にしみる。胃粘膜も荒れ放題なのか。

「つまみ食つとくんだったか」

職場から帰宅し、そのまま駅前のコンビニで缶ビールを数本買ったものの、肝心かなめのツマミを買い忘れた。気づいたのは国道の横断歩道を渡ってからで、今さら赤信号を待つて買いに戻るのも癪で、そのまま帰宅したのだった。

うっ、体冷えちまった……。

おれは二の腕をさする。

コタツで寝ると、掛け布団から露出した上半身が冷えてよろしくない。頭ではそう理解しつつも、コタツでぬくぬく微睡む気持ちよさに、ついつい長居してしまう。

「あー、今日早番か」

カレンダーの早のマークを見て、おれは忌々しさに舌打ちする。

早番は午後十時からの勤務なので、遅くとも九時には家を出なくてはならない。これから風呂を沸かし、夕飯の仕度をするとなると、いつまでもうだうだしてられない。

冷凍肉並みにこちこちの上半身を軽くひねって目覚まし代わりにすると、おれはテレビの電源を入れ、それをBGMにして米を炊く

仕度に取りかかることにした。

男の一人暮らしだろうと最低限米くらいは炊け、というのが栃木の両親のモットーだ。

その信条と関係あるのか知らんが、毎月、おれの住むアパートに米と野菜が届く。おかげで大学生活を始めて二年間、主食に不自由することはなかった。

もっとも、向こうはおれが東京でまじめに刻苦勉強していると思っているからこそ、まめに仕送りをしてくるんだろう。

実際は講義にもろくに出席せず、毎日バイトとコンパ三昧の自堕落な生活を送っているとは夢にも思っまい。

「うし、そろそろ出るか」

パソコンの時刻が二十一時を指したのを見ると、おれはブラウザを閉じてスタンバイにした。

ひとつ風呂浴びて飯を食ったあと、仕事に行くまでだらだらとネットをするのが至福のひとつだ。

だが、楽しい時間というのはまたたく間に過ぎてしまうもので、早くも次の勤務がやってくる。まったくもって気が滅入る。

学生だから週四日の勤務だが、社会人はこれを週五日、ヘタすると土日出勤までこなすんだからおそろしい。日本人働きすぎ。

けどま、食い扶持を稼がにや暮らしは成り立たんわけで、世の中ってやつはホントに世知辛いもんだ。

そんな愚痴をほざきながら、服を着替え、高校時代から愛用のシヨルダーバッグをひっ提げて家を出た。

おれが働いているのは、都内にある郵便局の某支店だ。そこでゆうメイトの深夜勤を三ヶ月前からやっている。

郵便局というのは、基本、二十四時間人がいて働いている。昼は昼で差立やら何やらで忙しいらしいが、夜も結構な忙しさだ。

支店の裏口につき、ロッカーでエプロンに着替えて郵便課の前に

並ぶと、すでに先輩メイトたちが数人集まってきた。

「あ、工藤さん」

おれを見つけるなり、こぼれるような笑顔で出迎えてくれたのは大学生の林太一だ。

太一はおれより一年先輩なのだが、年齢では年下なこともあっておれをさん付けする。

大学ではソフトテニス部所属らしいが、青白い肌と分厚いメガネ、くせのあるセミロングの黒髪という明らかにインドア系サークル風のいでたちなのが気になる。

「うちの部はみんなこんな感じですよ。雨の日は部室でスマブラ大会やニコ動鑑賞会とかしてますし」

「おれの知ってるテニサーと違う……」

「今度、ニコニコ動画に踊ってみた系の動画を上げる予定なんですよ」

「それ、もはやダンス部なんじゃね？」

とまあ、こんな彼だが、ゆうメイトとしては有能らしく、入社一年目ながら特殊や窓口などに入って活躍している。

「へえ、太一くんテニスやるんだ？」

太一の横の中年太りの男性が、おれたちの会話に割り込んできた。辻木昇、という髪に白いものが混じった四十すぎの黒ぶちメガネのおっさんだ。ゆうメイト三年目のベテランさんだ。

以前は建築資材メーカーの下請けで働いていたが、過労で倒れて会社を辞め、今はバイトの掛け持ちで口糊しているらしい。

バイトを三つもやっていても「以前の職場に比べたら楽」だそうだから、前職のブラックさ加減は相当だったようである。

「おれもさあ、若い頃は結構テニスとかやってたんだよね。太一くんと違って、おれのは硬式なんだけどさあ」

辻木さんがねちねちした口調でしゃべる。語尾に「さあ」をつけるのは彼の特徴だ。ゆうメイトの深夜勤は、結構変わっている人が多くて面白い。

そうこうしているうち、課長代理がやってきて、朝礼を始めた。夜なのに朝礼はおかしいが、必ず「おはようございます」から始める。そういう慣例だ。

他の支店の窓口で詐欺があっただの、重い米袋に果物の箱が潰される事案が発生したあの、と課代がくどくどと能書きを垂れるのを話半分に聞き流す。

隣の林くんは相づちを打ちながら真剣に聞いている。相変わらずのまじめくんだ。

辻木さんはおれ同様、うわの空だ。養豚場の豚のようなたるんだ目つきで、銀色のざらざらした不精ひげを撫でている。

出勤簿にハンコをつき、今日の担務を確認する。うちの支店では、仕事はローテーションでまわしているため、日によって受け持つ仕事異なる。

「また通常とコツか」

新入りのおれは勤務の大半が通常区分だ。所謂、普通の葉書や封筒、バルクと呼ばれるダイレクトメールやカタログなどを、配達区分に沿って仕分ける単純作業だ。

「最初のうちは、みんなそんなもんですよ。慣れてきたら、税付きとか区分機とかやらされますから」

税付きと言われても、新米のおれにはよく分からない。区分機は、郵便課の真ん前にどでかい装置が設置してあるので分かる。封筒や葉書などの小型郵便物は、これにがんが流して機械で区分する。

「僕も今日は通常ですから」

「あ、そうなんだ」

「今日は日曜なんで、そんなに忙しくないと思いますよ。小包も少ないはずですよ」

「そう願いたいもんだな」

おれたちは到着した郵便物を積載した銀色のパレットを押して、局内奥の区分場へと移動した。

深夜の局内は静かだ。職員の大半は帰宅し、残っているのは数人

の役職者と、おれたち深夜勤のゆうメイトくらいだ。

集配課のデスクの前を通過し、区分場に到着すると、パレットを開いて郵便物を出してゆく。

ケースに詰めてある郵便物を一抱え持ち、それぞれ区分だの前に立ち、区分をはじめめる。

区分だな、というのは小さな長方形の升に別れた鉄製の箱だ。学校にある下駄箱の、蓋がついてないものを想像したら、それでいたい合ってる。

その区分だには細かく番地が振ってある。たとえば「杜王町12-198」という風に、その地区の番号が大ざっぱに割り振ってある。

郵便物を道順に沿って細かく組み立てるのは、実際に配達する職員さんの仕事だ。おれたちメイトは、職員の組立の手助けのため、大まかに分類していくだけでいい。

大まか、とは言っても、ひとつの支店の担当地区は結構広いため、覚えるのはなかなか大変だ。特にうちの区は、番地の旧番と新番が入り混じっているんで一手間だ。

おれなどはいちいち新旧対応表と睨めっこしなくてはならないが、太一は流れるような動作で郵便物を区分する。

「おー、早業だな」

「こんなの工藤さんだって半年もしないで出来るようになります。むしろ、出来ない朝までに片づきませんか」

「早朝勤に文句言われちまうな」

太一の手の動きを真似して素早く区分しようとしてみるが、なかなか上達しない。手にした郵便物の住所を読み取るとき、どうしても動きが一瞬止まる。

難しいな。

住所が表記されている場所が、郵便物によってバラバラなのがくせものだ。ぱつとみると、どこが住所なのか分からず目がすべる。

それに加えて、手書きの拙い字から、DMの小さな印字まで、さ

まざまな文字の種類があるのが厄介だ。

差出人があやふやな住所で送ってきたり、宛名ラベルの表記が誤っていたりするので、油断するとすぐ誤区分が生じる。

一枚二枚なら誤差の範囲だが、あんまり誤区分が多いと職員から文句が飛んでくる。

「おい工藤」

かさばるタウン誌を区分だなに突っ込んでいると、背後から野太い声で呼ばれた。

「かごが満杯だ。集配課の前まで持ってつてくれや」

横柄な口調で命令するのは、六十すぎのごま塩頭の爺さんだ。石津琢郎という、ここの支店のゆうメイトでは古参株である。

「これ区分し終わるまで待っててください」

「いいから早くやれよ」

石津の爺さんがイライラした様子で指図する。おなじメイト同士なのに、古参だからか、まるで部下に命じるような口調だ。

わざわざ反撥するのもくだらないので、おれは愛想よく返事をして、郵便物で一杯のかごを集配課まで運んだ。

深夜に区分される郵便物は結構な量なので、かごが一杯になると集配課の方へ持って行き、カラのかごをカートに積んで戻ってくる。

「つたく、人使いの荒い爺さんだ。」

嘆息して戻ってくると、石津の爺さんが、何故かしかめっ面でお出迎えてくる。

「おい工藤、なんだこの区分は？」

「はあ」

「相生町の三丁目はこの下の棚だろ。半分近く間違ってるじゃねえか！」

「あ、それ一時的に入れてあるだけなんで心配ないです。それにあとでかごに入れ直した方が効率的ですから」

「バカが。んなことやってるから、おまえぜんぜん仕事覚えねえんだろ！」

石津が塩辛い声で頭ごなしに否定してくる。

正直、むっとする。

上司ならともかく、単なる先輩にここまで言われるのは業腹だ。高校時代のおねなら、絶対逆ギレして即日仕事をバツクレてる。

が、大学生にもなつてその程度でバイトを辞めたら忍耐が足らなすぎる。第一、すぐ金欠になるのは明白なので、おねは適当に申し訳なさそうな顔をして詫びを入れた。

「ったくよー、なんなのあのジジイは？」

「石津さんは誰に対してもあんな風ですよ。僕も新人の頃は、よくいびられました」

石津から離れたところで愚痴ると、太一がはんなりと眉をしかめる。

「けど、あんな風に否定されるのはなあ。おねのやり方が、絶対楽なのにな」

「古参の人つて、自分のやり方にポリシー持つてるんで、新人が効率的な手法でやると嫌がるんですよ」

「昔かたぎの職人かよ……」

むすつとした仏頂面で黙々と区分する石津を、おねは横から睨みつける。

そうこうするうち休憩時間になったので、おねたちは食堂に引きあげることにした。

昼間は職員で賑わう社員食堂も、午前三時ともなると閑散としたものだ。自販機の駆動音が、やたらと小うるさく聞こえる。

適当な席に座って羽根を伸ばしていると、そろそろと別の担務の深夜勤が戻ってきた。

ニコチンを入りに喫煙室に行く人や、テレビのリモコンをまわす人、携帯ゲーム機をはじめめる人、椅子を並べて仮眠をとる人。めいめい好き勝手にすごしている。

コンビニの弁当をレンジで温めてもそもそ食っていると、突然う

なじに熱い感触がした。

「あちち！」

「あ、ごめん熱すぎた？」

「なんだ樋内さんか」

どこことなく鼻にかかったハスキーな声に、おれはほっと胸を撫でおろした。実際はさほど熱くなかったが、まったり休憩している最中だったので不意打ちだった。

「ごめんね。おどかさうと思って」

樋内さんがおれの隣の椅子に座る。

空気が動いて微かにベルガモットのにおいがたちこめ、思わず胸がどきつとした。

樋内さんの香水か。

さすが妙齡の女性だ。これが他の男どもなら、隣に座られると加齢臭と腋臭で不愉快な思いをするだけである。

樋内千紗さんは、ゆうメイト深夜勤の紅一点だ。肩まである髪をシユシユで束ね、薄手のとっくりセーターに薄藍色のジーンズという活動的な服装だった。

愛用のベージュのセーターはぱつんぱつんで、樋内さんの豊満なバストラインがエプロンごしでもよく分かる。

てか、正直反則級のエロさだ。

「はい、コーヒーどうぞ」

「あ、すみません」

つい胸もとに吸い寄せられがちな視線を厳しく戒め、おれは甘ったるい缶コーヒーをちびちび舐める。

「林くんから聞いたわよ。石津さんに絡まれてるんだってね」

「そうなんですよ」

「おかしいわね。石津さん、わたしにはここにこにこ愛想よくしてくれるけど」

それは貴女が美しく、なおかつあの爺さんが助平だからですよ、と喉もとまで出かかった言葉を激甘コーヒーで呑みくでした。

「工藤くんって、何回生？」

「は？」

「あ、大学何年生？」

樋内さんが思い出したように言い直した。

大学の学年を回生で表すのは関西流だ。もしかすると、樋内さんはそっちの生まれなんだろうか。

「そっか二年生かあ。若つかいなー」

年寄りくさい台詞を吐きながら、樋内さんはメランコリックな姿勢で頬杖を突く。

院の博士後期課程に所属する樋内さんは、大学に残って専攻の東南アジア史研究をつづけるかたわら、生活費の足しにゆうメイトをやっているそうである。

女子高時代はチアリーディングの土台だったと豪語するだけあって、腕力はそこらのもやし男子とは比べものにならない。十キロの米袋程度なら軽がる肩に担いでしまう。

これほどの美人で、かつ明晰な頭脳を持ちながら、どうしてこんな冴えない場所で働いているのかは永遠の謎だ。

「石津さんもね、ああみえて結構苦労人なのよ。一昨年の暮れに、奥さんを自動車事故で亡くされて、ずっと独身暮らししてるみたいだから」

「ほかの家族は？」

「娘さんがいるみたいだけど、なんだか疎遠らしいのよ。まあ、この辺の事情は深くは訊けないから漠然としてるけど」

樋内さんが難しい顔をする。

奥さんに先立たれ、男やもめの独り暮らしと聞くとなんだか気の毒になる。むろん、だからと言って横暴を許す気にはなれない。

休憩時間がそろそろ終わるので、おれたちは食べた後始末をして席を立った。

喫煙室からぞろぞろと不景気な顔をした男どもが出てきて、一日の後半戦の火蓋が切って落とされた。

食事休憩を挟んだあとは、たいてい小包の応援にまわる。

半地下にあるトラックの発着場に向かうと、ちょうど港からの大型トラックが到着したところだった。

荷受け口の両開きのドアが全開にされ、真冬の冷気がびゅうびゅう吹き込んでくる。パーカー一枚だと凍える寒さだ。

運転手が白い息を吐きながら運行表をわたし、樋内さんがそれを受け取って日付印を捺す。その間に、応援のおれと太一が、トラックに満載のパレットを局内に運びこんだ。

「おいおい、話が違うぞ。コツ大量着弾じゃねえかよ」

大量に到着したゆうパックを前に、おれは太一に絡んだ。

「あらー案外多いですねえ」

太一は呑気なものだ。

これでもお歳暮お中元なんかの繁忙期に比べたらましですからね、などと言いながら、さっさと到着入力にまわる。

おれは重い米袋やら缶ビールのギフトセットやらをふうふう言いながら運び、到着入力の済んだ小包を片っぱしから区分してゆく。

時刻はすでに午前四時をまわっている。これからどんどん荷物が輸送されてくるので、早め早めに処分しないと、トラックヤードが銀パレで埋め尽くされることになる。

落ちモノパズルゲーと一緒に、ある程度荷物が溜まると身動きが取れなくなつて極端に作業効率が低下する。そうなる前に片づけてしまわないと大変だ。

「ほら、おまえらさっさと運べ。詰まっちゃまうぞ。そら、ボケっとしてんな！」

石津が声を荒げて指図してまわる。

偉そうなことを言うのなら、お手本をみせてくれって感じだが、当人は応援するでもなく、区分機の方を手伝つてお茶を濁している。力仕事をしたくないので、なるべく楽な方を手伝おうとしているのだ。

「仕方ないですよ。ご高齢ですし」

「ご高齢だったって、おれよか高い時給もらってるんだぞ。せめて手伝ってくれよな」

「ですよねー」

「ですよねー、じゃねえつての。」

職員に注意してもらいたいが、肝心の課長代理はデスクに引つ込んだまま出てこないし、古参の石津には文句を言わない。実質、現場は横暴爺さんの言うがままだ。

「畜生、なんなんだよ……」

ゴルフバッグやらスキーバッグやらを両手に持ち、血を吐く思いで運搬した。一便片づく前に次の便が到着するので、現場は脑梗塞を起こした血管並みに詰まってきている。

「ほら、工藤くんガンバ」

横から励ましてくれる樋内さんだけが、唯一のおれの癒し、心の拠り所だ。

彼女が微笑みかけてくれるだけで、疲労困憊の体にふしぎな活力が湧いて出てくる。

それから四時間近く、おれたちはひたすら荷物を運んだ。持ち、運び、積み、下ろす作業をひたすらひたすら反復した。

早番なので六時上がりなのだが、とても片づかないので二時間分の超勤までして、どうにか今朝の到着分を全部片した頃には、午後八時すぎだった。

「お、終わった……」

最後の一個を運び負えると、おれはへなへなと壁にもたれた。

周囲は出勤してきた委託業者が行き交い、現場は殺気だった雰囲気だ。呑気に突っ立っていると舌打ちされるので、そそくさと退勤のハンコを押して食堂に帰還した。

「あ、お疲れさま」

ポカリを手にした樋内さんが、フェイスタオルで汗を拭きふき笑顔を振りまく。

彼女だつて疲れているんだろうに、おれと違って嫌な顔ひとつしない。人間が出来すぎてて、ちょっと気後れすら感じる。

「お疲れさまです。お先失礼しえす」
疲れ果ててぞんざいな口調になる。

こんな日はさつさと帰って酒呑んで寝るに限る。所属ゼミのレジユメ作成の件が頭に浮かんだが、光の速さで揉み消した。

「あ、待って工藤くん」

「なんすか？」

「ねえ、工藤くんってお肉好き？」

「えっ……あ、まあ」

好きですよ、好き好き、とくに樋内さんのそのエプロンの下のナイスな肉とか大好きです、と心の中で付け足した。

「お歳暮でもらった米沢牛があるんだけど、わたしお肉だめなの。良かつたら、工藤くんうち来ない？」

「おれが樋内さんちに？」

「遅めの新年会を兼ねて、焼き肉をやるうと思うの。どうかしら？」

おいおい、なんだこの強運。年始早々、今年の運気を使い果たしちゃったか。年末あたり運気欠乏で死ぬ予感。

「たいしたおもてなしはできないけど」

「行きます」

むしろ行かせて頂きます、的な心境だったが、そこまで言うときモがられるので、素っ気なく、だが確乎たる意思を伝える。

「良かった。じゃあ、林くんと一緒に来週辺り来てくれるかしら」

「太一と？」

おれの心の中で何がへこむ音がした。

「ええ、肉の量が多すぎて工藤くん一人だと食べきれないと思うの」
「あー、いやその」

おれ一人でも二人前食べます、と言おうとして尻込みする。食いしん坊だと思われるのは嫌だし、下心を悟られるのは論外だ。

「じゃあ、来週の都合のいい日を教えてくれる。太一ちゃんと合わせ

て日時決めるから」

「あとでメールしときます」

「うん、じゃあメアド教えとく」

さりげなくメアドまでゲットした。

これならたとえ邪魔者付きだろうと十分モト(?)は取れた。高望みしたらきりがないし、メアドと高級焼き肉で手打ちだ。

スマホのメーラーを開く樋内さんの真っ白な細い指を見つめ、おれはだらしなくでれでれと鼻の下を伸ばすのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7652z/>

勇者はひらりと身をかまし

2011年12月25日00時56分発行